

「気持ちのぶつかり合い」を経験していますか

集団生活では、自分の気持ちを大切にしながら、周りの人を思いやる心も育まれます。

近年は、子どもの気持ちを受け止めながら関わる育児が広がり、子どもが安心して気持ちを表現できる環境が増えてきました。一方で、気持ちを切り替えたり、相手の気持ちを想像したりすることは、経験を通して少しずつ育っていく力でもあります。他者との関わりをとおして自分の気持ちを整える力も育まれていきます。これは、**幼児期の大切な学び**の一つです。

園生活では、おもちゃの取り合いや順番待ちなど、友達とぶつかることがあります。まだ言葉でうまく伝えられない子どもたちにとっても、こうした葛藤は**学びのチャンス**です。ぶつかり合いの中で自分の気持ちを主張し、同時に**相手の思いを知る**ことで、子どもたちは少しずつ折り合いを付けていけるようになります。

思いが伝わらず思い通りにならない経験、伝わらないもどかしさを感じる経験をとおして子どもたちは、「どうすればいいかな」「どう話せば分かってもらえるかな」と**試行錯誤**するようになります。**こうした経験**は、子どもたちの小学校以降の生活を支える**自制心**や**コミュニケーション能力**を育みます。



大人は「見守り役」&「聞き役」に

子どもたちのぶつかり合いを目の前にすると、つい大人が「どっちが悪いの?」と原因を探したり、解決を急がせたりしたくなるものです。怪我をするおそれがあるときや一方的に手を出している場合は止める必要がありますが、そうでなければ大人は**静かに見守り、聞き役**に回りましょう。



大人は「悔しかったんだね」「そうしたかったんだね」と、それぞれの**気持ちを言葉にする**だけで十分です。子どもの**自分の気持ちを分かってもらえたという安心感**が、**相手の気持ちに気付く心のゆとり**を生み出します。解決は子どもたちに任せる、そんな見守りが、子どもの**自分で考える力を育んでいきます**。

架け橋ポイント

こうした“自分で考えて折り合いをつける経験”は、幼児期だけで終わるものではなく、小学校・中学校と長く続いていく大切な学びです。大人が急いで解決するのではなく、子ども自身に任せる時間をつくるのが、これからの成長を支える大きな力になります。